

文明本『節用集』呉音漢音の対応関係 唇内舌内撥音字の母音をめぐって

侯 鋭

要 旨

観察文明本《節用集》中[n][m]韻尾漢字的读音，可以发现“吳音”与“漢音”间有着比较规则的元音对应关系。这种关系是怎样形成的？其依据是什么？笔者将书中大量[n][m]韻尾漢字的“漢音”假名注音按《韻圖》分类考察后，注意到“漢音”的结构与《韻圖》中各韻系的主要元音、等以及开合有关。“声”姑且不论，就“韻”来看，文明本《節用集》中[n][m]韻尾漢字的“漢音”对这三者都有不同程度的遵循。这种遵循并非完全彻底，而是相互交叉，甚至有时还游移不定。

キーワード……墨筆音注 朱筆音注 主母音 等 開合

一、初めに

文明本『節用集』（以下文明本と略す）¹⁾は、見出し字の両側にそれぞれ墨筆音注加点・朱筆音注加点という色分け表記によっていわゆる呉音と漢音の区別（唐音は別として）が示されている。しかし、その呉音と漢音は具体的にはどのように対応しているのか、その対応関係は何を意味しているのかについて、管見の限りまだ解明されていない。中世の字音を考えるために、はっきりさせなければならない問題点の一つとして取り上げたいと思う。

本稿は、墨筆と朱筆の色分けに示し分けられている音注加点を手がかりに、唇内舌内撥音字字音の考察を通じて、文明本における呉音と漢音の対応関係の一斑を覗いてみることを目的とする。

文明本における唇内・舌内撥音の墨筆音注加点用例は、筆者の調査によると、70 数例ある。その中、見出し字の右側の墨筆音注加点に対立する左側に朱筆音注加点が付しているのは大半である。その墨筆音注加点と朱筆音注加点の違いを、日本語五十音図の行と段の仕組みと音節構成をあわせて考えれば、次のいくつかの種類に分けることが出来よう。まず、子音が違う用例は、例えば、任（ニン/ジン p19²⁾・男（ナン/タン p159）・万（マン/ハン p570）のようなもので、子音は違っているが母音は一致している。次に、それに対して、子音は同じであるが母音は違う用例で、間（ケン/カン p12）・山（セン/サン p188）・返（ヘン/ハン p12）・今（コン/キン p387）・根（コン/ケン p6）・犯（ボン/ハン p17）・紋（モン/ブン p61）といったようなもの

のがある。また、音（ヲン/イン p14）遠（ヲン/エン p175）のような所謂半母音要素が含まれる用例もすこしある。更に、丸（ヲン/グワン p444）という子音にも母音にも違いがあるものもあるが、極めて数が少ない。

本稿は、主に母音をめぐる呉音・漢音の対応関係を考えるので、上述の母音の違いがある墨筆音・朱筆音の対応関係を考察の対象とする。母音に違いがなく、子音の違うグループは、そういうわけで除外することにした。

また、呉音と漢音の対応関係を考えることが本稿の主旨であるため、朱筆音注に現れている唐音の用例は『聚分韻略』の左注唐音³⁾を参考にして排除し、同じ見出し字の右左両側に付している墨筆・朱筆音注加点の対应用例と、墨筆音注加点のみの用例、及び朱筆音注加点のみの用例を取り上げて検討することにとどめる。

なお、多少見づらいかもしいが、横書き形式の本稿表記の便宜上、縦書き形式の文明本見出し字の右左に付する音注加点を以下のように記すことにした。見出し字の右左両側に墨筆音注加点と朱筆音注加点がともにある場合の挙例は、右側墨筆音注加点を「ノ」記号の左側に、左側朱筆音注加点を「ノ」記号の右側に写す。また、見出し字に墨筆音注があっても朱筆音注がない場合は、「ノ」記号の右側に「無」と示し、墨筆音注加点がなく、付しているのは朱筆音注加点のみの場合は、「院エン(p416)」のように、その音注加点は見出し字の右にあるか左にあるかを問わず、すべて見出し字の右側に写した。

二、墨筆音注加点・朱筆音注加点における母音の違い

文明本では唇内撥音字と舌内撥音字との韻尾の違いを示すための印などがなく、僅かな幾つかの「ム」韻尾をする音形を除けば、すべての音形は「ン」で終わっている。故に、ここでは、唇内撥音字と舌内撥音字の用例を分類せずに検出し、まず日本語表記としての母音の異同を概観してみたいと思う。

文明本の唇内舌内撥音字の墨筆音注加点と、それに対応している朱筆音注加点との主母音の違いについて、以下のように分類してまとめてみた。

なお、文明本では、同じ字が全文において複数回繰り返し出現するものが多数あるが、本稿ではその重複をさけて、異なる音形がない限り代表例の形で挙げることにし、異なる音形がある場合は同じ字であっても複数挙げる。参考のため、用例の後に広韻韻目を示しておく。

[i] [e]・[o]のグループ

イン エン・ヲン

院イン/エン(p5)[桓・線] 殷イン/ヲン(p5)[欣・山]

ピン ベン

便ピン/ベン(p628)[仙・線]

[u] [o]のグループ

寸スン/ソン (p12) [恩]

[e] [a]のグループ

セン サン

山セン/サン (p188) [山]

懺セン/サン (p1096) [鑑]

ケン・ゲン カン・ガン

間ケン/カン (p12) [山・欄] 限ゲン/カン (p89) 眼ゲン/カン・ガン (p96・p941) 簡

ケン/カン (p195) [産] 減ゲン/カン (p226) [賺] 監ケン/カン (p502) [銜・鑑]

綱ゲン/無 (p476) [広韻にこの字なし]

ヘン ハン

攀ヘン/ハン (p122) [刪] 反ヘン/ハン (p116) [元・阮] 返ヘン/ハン (p12) [阮]

貶ヘン/ハン (p108) [琰]

[o] [i]・[u]・[e]・[a]のグループ

コン・ゴン カン・キン・ケン・ゲン

紺コン/カン (p663) [勘]

勤ゴン/キン (p100) 勲コン/キン (p227) [欣] 近コン/キン (p472) [隱・焮] 琴ゴン/キン

(p237) 今コン/キン (p387) 金コン/キン (p659) [侵]

根コン/ケン (p6) [痕] 言ゴン/ゲン (p101) [元] 獻コン/ケン (p11) 建コン/ケン (p693)

健ゴン/ケン (p868) [願] 嚴ゴン/ゲン (p174) [嚴] 犍コン/無 (p653) [元・仙] 權ゴン/

無 (p655) [仙]

ボン・ホン ハン・ヒン

凡ボン/ハン (p45) [凡] 犯ボン/ハン (p17) [范] 煩 (ボン/ハン p104) 翻 (ホン/ハン p941)

[元] 返 (ホン/ハン p103) [阮] 叛 (ホン/ハン p463) [換]

品 (ホン/ヒン p597) [寢] 焚 (ボン/無 p102) [文]

ヨン イン・ウン・エン・グワン

音ヨン/イン (p14) 陰ヨン/イン (p211) [侵] 飲ヨン/イン (p211) [寢・沁] 蔭ヨン/無 (p226)

[沁] 愍ヨン/無 (p227) [欣]

温ヨン/ウン (p214) [魂] 溘ヨン/無 (p224) [吻・問・魂]

園ヨン/エン (p811) [元] 怨ヨン/エン (p226) [元・願] 苑ヨン/エン (p915) [阮]

遠ヨン/エン (p175) [阮・願]

丸ヨン/グワン (p444) [桓]

[o] [u]のグループ

モン ブン

紋モン/ブン(p61)文モン/ブン(p11)蚊モン/ブン(p1073)[文]聞モン/ブン(p63)[文・問]問モン/ブン(p13)[問]

[a] [e]のグループ

クワン・グワン ケン・ゲン

元(グワン/ゲン p498)萱(クワン/ケン p500)[元]巻(クワン/ケン p11)[阮・仙・獮・線]願(グワン/ゲン p100)[願]還(グワン/無 p544)[刪・仙]

以上の用例を音注加点の種類に基づいてまとめると、墨筆朱筆という二種類の音注加点が、「ケン」と「カン」,「コン」と「キン・ケン」,「ヲ」と「イン・エン」,「ホン」と「ヒン・ハン」,「モン」と「ブン」,「クワン」と「ケン」などのように対応していることから、墨筆音注加点と朱筆音注加点の母音の対応状況において、それなりの法則があるように見える。しかし、その法則は何なのか、例えば、墨筆音注はどんな場合に「-oン」型音形をし、それに対して朱筆音注は何によってそれぞれ「-iン」「-uン」「-eン」「-aン」の音形をもって対応するのかなどについて、ここの対応用例だけではまだ説明できない。そういった問題を解決するためには、まず墨筆音注と朱筆音注の体系の確認や、各母音相違グループの対応関係の全体的な分析をしなければならない。

三、文明本墨筆音注の体系

文明本の字音体系は、墨筆音注加点と朱筆音注加点に示し分けられていても、呉音の漢音への混入や、朱筆音注における漢音・唐音の混在⁴⁾など、決して単純なものではないことは周知の通りである。個別的な異なる体系に属する用例の存在によって、全体的な流れを見極める作業がひっかかる恐れがあるので、文明本自身の字音体系(ここでは主に呉音と漢音)を参考文献に照らす形で相対的に確認しておく方法を考えた。

そこで、その参照の対象としてふさわしい文献は他にもたくさんあろうが、煩雑な作業を避けて、心空の『法華経音義』⁵⁾を選んだ。この書は、文明本以前の時代の字音を反映していることと、小倉肇氏によると、他の法華経三内音義諸本、具体的には大永本・永和本上・天文本・東北大(乙)などとほぼ同じ系統のもの⁶⁾であること、そして、文明本の墨筆音は勿論、朱筆音と同じ音形も見出すことが出来ることは、文明本の字音体系を確認するのに役立つであろう。文明本以前の字音体系を参考すれば、文明本の字音体系の時代的特徴が見出される。また、一つの文献に文明本の墨筆音体系と朱筆音体系をともに確認できれば、その字音体系の区別のシステムを理解するのに有利であろう。

ただし、一つだけ事前に断らなければならないが、法華経音義の字音を参考するということは、あくまでも法華経音義の字音を、文明本の字音体系を確認するための参照物として利用す

るに過ぎない。法華経音義の字音体系はどうかについて触れるつもりはない。

これからは、まず文明本の墨筆音注加点の用例から法華経音義の字音を参考にしながら観察していきたい。

文明本の見出し字は多いので、文明本にあって、心空の法華経音義にない用例が一部ある。対照のためにその一部を「なし」としてまとめると、次の通りである。

	文明本の用例	広韻韻目	法華経音義の用例
山撰の場合			
桓韻系	院イン/エン (p5)	[桓線]	なし
	丸ヲン/グワン (p444)	[桓]	丸クワン (三丁)
	叛ホン/ハン (p463)	[換]	なし
刪山仙韻系	攀ヘン/ハン (p122)	[刪]	なし
	還グワン/無 (p544)	[刪仙]	還クエン (三丁)
	山セン/サン (p188)	[山]	山セン (七丁)
	間ケン/カン (p12)	[山禰]	間ケン (四丁)
	限ゲン/カン (p89)	[産]	限ケン (四丁)
	眼ゲン/ガン (p941)	[産]	眼ケン (四丁)
	簡ケン/カン (p195)	[産]	なし
	便ピン/ベン (p628)	[仙線]	便ヘム (十二丁)
	權ゴン/無 (p655)	[仙]	權コン (四丁)
	元韻系	反ヘン/ハン (p116)	[元阮]
犍コン/無 (p653)		[元仙]	なし
言ゴン/ゲン (p101)		[元]	言コン (四丁)
煩ボン/ハン (p104)		[元]	煩ホム (十二丁)
翻ホン/ハン (p941)		[元]	なし
怨ヲン/エン (p226)		[元願]	怨ヲン (二丁)
園ヲン/エン (p811)		[元]	園ヲン (一丁)
元グワン/ゲン (p498)		[元]	なし
萱クワン/ケン (p500)		[元]	なし
返ヘン/ハン (p12)		[阮]	返ヘム (十二丁)
返ホン/ハン (p103)		[阮]	なし
遠ヲン/エン (p175)		[阮願]	遠ヲン (一丁)
苑ヲン/エン (p915)		[阮]	なし
巻クワン/ケン (p11)		[阮仙獮線]	巻クワン (三丁)
獻コン/ケン (p11)		[願]	獻コン (四丁)

文明本『節用集』呉音漢音の対応関係(侯)

	建ゴン/ケン (p693)	[願]	建ゴン (四丁)
	健ゴン/ケン (p868)	[願]	健ゴン (四丁)
	願グワン/ゲン (p100)	[願]	願クワン (三丁)
咸撮の場合			
覃談韻系	紺ゴン/カン (p663)	[勘]	紺ゴン (四丁)
咸銜韻系	減ゲン/カン (p226)	[賺]	減ケン (四丁)
	監ケン/カン (p502)	[銜鑑]	なし
	懺セン/サン (p1096)	[鑑]	なし
	眩ヘン/ハン (p108)	[琰]	なし
	嚴ゴン/ゲン (p174)	[嚴]	嚴ゴン (四丁)
	凡ボン/ハン (p45)	[凡]	凡ホム (十二丁)
	犯ボン/ハン (p17)	[范]	犯ホム (十二丁)
臻撮の場合			
痕魂韻系	寸スン/ソン (p12)	[恩]	なし
	根ゴン/ケン (p6)	[痕]	根ゴン (四丁)
欣韻系	殷イン/ヨン (p5)	[欣山]	なし
	勤ゴン/キン (p100)	[欣]	勤ゴン (四丁)
	勲ゴン/キン (p227)	[欣]	勲ゴン (四丁)
	近ゴン/キン (p472)	[隱焮]	近ゴン (四丁)
	慇ヨン/無 (p227)	[欣]	慇ヨン (一丁)
文韻系	焚ボン/無 (p102)	[文]	焚ホム (十二丁)
	蕙ヨン/無 (p224)	[吻問魂]	なし
	温ヨン/ウン (p214)	[魂]	なし
	紋モン/ブン (p61)	[文]	なし
	聞モン/ブン (p63)	[文問]	聞モン (十三丁)
	文モン/ブン (p11)	[文]	文モン (十三丁)
	問モン/ブン (p13)	[問]	問モン (十三丁)
	蚊モン/ブン (p1073)	[文]	なし
深撮の場合			
侵韻系	今ゴン/キン (p387)	[侵]	今ゴン (四丁)
	琴ゴン/キン (p237)	[侵]	琴キン (二丁)
	金ゴン/キン (p659)	[侵]	金ゴン (四丁)
	品ホン/ヒン (p597)	[寢]	品ホム (十二丁)
	音ヨン/イン (p14)	[侵]	音ヨン (二丁)

陰ヲン/イン (p211)	[侵]	陰ヲン (一丁)
飲ヲン/イン (p211)	[寢沁]	飲ヲン (一丁)
蔭ヲン/無 (p226)	[沁]	なし

文明本にあって心空の法華経音義にもある字の音形を比べると、法華経音義の「丸クワン(三丁)」「還クエン(三丁)」「琴キン(二丁)」「便ヘム(十二丁)」4例以外、すべて一致している⁷⁾。文明本は心空の法華経音義と伝承関係はあるかどうかを別として、文明本の墨筆音形を、呉音資料と認められている法華経音義に求めることが出来ることは、法華経音義と同じ系統の呉音であると言えそうである。

ところが、文明本の音注加点で音形として法華経音義に一致しているのは、墨筆音注加点だけではなく、上に挙げた4例も含め、朱筆音注加点の用例も多数あるのである。文明本字音体系の性格を把握するためには、文明本朱筆音注加点の音形と法華経音義字音との関係も観察してみる必要があると思う。

四、文明本朱筆音形と法華経音義の音形

文明本の唇内・舌内撥音の朱筆音注加点用例を、法華経音義における唇内・舌内撥音のすべての用例にあわせてみると、これも大勢音形が一致していることが分かる。文面の都合上、実例を省略して音形だけをまとめて次のように分類してみた。

まず、次の1~5の用例に関連する事項の説明をしておく。

- A) 「[法]」、「[文]」は、法華経音義と文明本(朱筆音注)の略称。
- B) 音形の後に付いているローマ数字はその音形をしている例字の数を表す。
- C) 1~4の内容として、「[文]」の合計数は、「[法]」総数と違うことがあるが、それは、文明本の朱筆音注が複数種類あるからである。例えば、法華経音義字例の「減ケン(四丁)」という種類の音形に対して、文明本では、「減カン(p16)・減ケン(p602)」と二種類の音形が見られる。音形が違うのでそれぞれカンとケンの音形グループにくわえられると、総数は法華経音義の総数より一つ多くなる。
- D) なし+数字の場合は、法華経音義にあって文明本にない漢字の数を表す。

1. 完全に音形が違う用例

クエン 11[法] ケン 9・クワン 2・カン 1・なし 1[文]
 エン 15[法] エン 14・なし 1[文]

法華経音義にはワ行「エン」音形とア行「エン」音形のグループが別々にあるが、文明本では、「エン」の一種類のみで、ワ行「エン」音形とア行「エン」音形の区別はない。また、法華経音義では、「クエン」も「ケン」も「クワン」もあるが、文明本には「ケン」と「クワン」は

あるが、「クエン」はない。

2. 子音の異同がある用例

ニン 7[法] ジン 4・ジュン 1・ニン 2・チン 1・なし 1[文]

マン 7[法] バン 2・マン 3・なし 2[文]

ナン 6[法] ナン 3・ダン 1・なし 2[文]

3. 母音の異同がある用例

ラン 13[法] イン 6・エン 3・ラン 3・なし 2[文]

コン 21[法] ケン 5・ゲン 3・キン 7・ギン 1・コン 2・カン 2・ガン 1・なし 1[文]

ホム 12[法] ヒン 1・ホン 3・ハン 5・テン 1[文]

モン 5[法] フン 3・ブン 3・モン 2[文]

4. 大体同じ音形をするが多少違う音形も見られる用例

アン 6[法] アン 5・エン 1[文]

カン 16[法] カン 11・ガン 4・ケン 2[文]

クワン 13[法] クワン 10・グワン 1・ケン 2・ゲン 1[文]

ケン 28[法] ケン 16・カン 6・ガン 2・なし 3[文]

シユム 7[法] ジユン 4・シユン 2・ソン 1[文]

セン 37[法] セン 24・ゼン 6・サン 2・なし 6[文]

チン 6[法] チン 3・チン 1・テン 1・なし 1[文]

トン 4[法] トン 3・ドン 2・タン 1[文]

ヘム 11[法] ヘン 7・ハン 2・なし 2[文]

5. まったく同じ音形をしている用例

イン 5[法] イン 5[文]

ウン 2[法] ウン 2[文]

キン 5[法] キン 4・なし 1[文]

クン 7[法] クン 6・なし 1[文]

サン 10[法] サン 8・ザン 3[文]

シン 25[法] シン 22・ジン 3[文]

ソン 5[法] ソン 4・ゾン 1[文]

タン 20[法] タン 13・ダン 4・なし 4[文]

テン 14[法] テン 11・デン 1・なし 2[文]

子ン 4[法] 子ン 4[文]
 ハム 4[法] ハン 3・なし 1[文]
 ヒン 9[法] ヒン 5・なし 4[文]
 フン 5[法] フン 4・なし 1[文]
 ミム 3[法] ミン 2・なし 1[文]
 ラン 7[法] ラン 6・なし 1[文]
 リン 6[法] リン 6[文]
 レン 8[法] レン 7・なし 1[文]
 ロン 1[法] ロン 1[文]
 メン 6[法] メン 5・なし 1[文]
 エン 3[法] エン 2・なし 1[文]

これから、朱筆音注の方も以下のように一致している部分があることを指摘しておきたいと思う。

(1) 「1」の完全に音形が違うような例では、法華経音義と文明本間の字音表記や仮名遣いの要素も含まれているが、主母音を取り上げると、の 11 例[法]中 9 例[文]、の 15 例[法]中 14 例[文] (内 1 例[文]はなし) が一致しているということになる。主母音が一致している用例はほとんどである。なかでも、ワ行「エン」音形とア行「エン」音形の区別がない文明本の特徴を考慮に入れれば、法華経音義の「エン」型 15 例に対して、文明本の用例は全部一致していることになる。

(2) 「3」の場合は、若干同じ音形(或いは同じ「o」主母音)をしている用例(例えば、[法]恨コン(四丁) / [文]恨コン(p17)・[法]困コン(四丁) / [文]困コン(p67)、[法]本ホム(十二丁) / [文]本ホン(p11)、[法]門モン(十三丁) / [文]門モン(p5)・[法]問モン(十三丁) / [文]問モン(p1065)など)はあるが、主な流れとして大体第三章で観察した呉音と漢音の関係と同じような[法] [文]対応をしているものと見てよからう。

(3) 法華経音義の「5」は言うまでもなく、「4」も清濁の表記を保留して計算すれば、～合わせて 128 例に対して、文明本朱筆音注例では、違う音形をしているのは 21 例、「なし」は 12 例、同じ音形をしているのは 99 例ある。同じ音形をしている用例は圧倒的に多い。

(4) 子音が違う「2」のグループは本稿の主母音中心の主旨によって除き、主母音が違う「3」のグループは第三章で見た呉音漢音の対応関係と同じものとして除くと、文明本朱筆音注加点字の音形(主母音だけが一致している用例も含む)は、法華経音義「1」「4」グループの大部、「5」グループの全部に一致している。

結局、前章「三」で観察した文明本の墨筆音注加点の音形はほとんど法華経音義と一緒にあると同時に、この第四章の調査で分かったように、朱筆音注加点の音形も法華経音義の「4」「5」グループと一致しているのは 83% 強ある。更に、主母音に焦点を絞り、主母音だけが一致して

いる用例も含む文明本朱筆音注加点の音形が法華經音義の「1」「4」「5」三グループに一致している用例を数字にしてみると、

$$\begin{array}{cccc} \text{「1」} & \text{「4」} & \text{「5」} & \text{「1+4+5」} \\ 26 : 23 (\text{なし } 2) + 128 : 99 (\text{なし } 12) + 149 : 132 (\text{なし } 19) = 303 : 254 (\text{なし } 33) \\ \text{[法] [文]} & \text{[法] [文]} & \text{[法] [文]} & \text{[法] [文]} \end{array}$$

のように、用例数はもう少し多くなり、法華經音義にあって文明本にない字例（10%強）と法華經音義と違う音形をしている（5%）用例を除いて、約84%の音形が一緒であることとなる。

そういう事実を踏まえ、前章の文明本呉音体系に関する調査も含めて考えると、次のような結論を得ることが出来よう。

まず、文明本と心空の法華經音義における唇内・舌内撥音字の音形には、クエン[法]とケン・クワン[文]、エン[法]とエン[文]、そして[m]韻尾を表すヘム・ホム...[法]と[m][n]韻尾がともに「ン」となっているヘン・ホン...[文]などの違いがあっても、主な流れとして音形上の同一性が見出される。その音形上の同一性があることに、法華經音義の代表する時代と文明本の代表する時代との間に存在する字音系統の史的関連性が反映されていると思われる。ところが、そういう音形上の史的関連性を持っていながら、文明本では、クエンに対してケン・クワン、エンに対してエン、そして[m]韻尾のムをンにとなっていることは、自分なりの音形系統を成していると見ることが出来る。また、心空の法華經音義で文面上字音体系についての区別がないのに対して、文明本では、墨筆・朱筆という色分けの加点形式によって呉音・漢音（朱筆音注加点に一部唐音も混じっている⁸⁾）が、ここでは論及しない）という二つの字音体系に分類している。これもまた大きな違いである。

そういう同一性と相違点を合わせて考えると、心空の法華經音義との史的関連性を持つことを示している音形はたくさんそのまま呉音が漢音に存在していながら、文明本は音形を統一し、字音を呉音と漢音に分けているのは、一体何のために、そして何に基づいて行われているのか、という疑問を抱かざるを得ない。その疑問を解くためには、文明本字音の構造に鍵を探さなければならぬと思う。

五、朱筆音注字音の構成状況

さて、「二」の墨筆音注加点と朱筆音注加点を比較して見てきたように、漢音の呉音への対応は、一定の法則に沿って行われている現象があるようである。その法則のようなものは、一体どんな仕組みで出来ているのであろうか。具体的に言えば、墨筆と朱筆の二種類の音注が、「ケン」と「カン」_レ、「コン」と「キン・ケン」_レ、「ヲ」と「イン・エン」_レ、「ホン」と「ヒン・ハン」_レ、「モン」と「ブン」_レ、「クワン」と「ケン」などのように対応しているのは何に基づいて行われているのであろうか。その対応関係に関わる理由を探してみたい。以下記述の便宜のため、「二」

のグループ単位を少し整理して考えることにしよう。

1、[e] [a] のグループ

[e] [a] グループの用例を見ると、

山セン/サン (p188)[山] 間ケン/カン (p12)[山・欄] 限ゲン/カン (p89) 眼ゲン/カン・
ガン (p96,p941) 簡ケン/カン (p195)[産] 減ゲン/カン (p226)[謙] 監ケン/カン (p502)
[銜・鑑] 懺セン/サン (p1096)[鑑] 返ヘン/ハン (p12)[阮] 販ヘン/ハン (p108)[琰]
反ヘン/ハン (p116)[元・阮] 攀ヘン/ハン (p122)[刪]

のように、山(山産欄)・元(元阮)・刪(刪)・鹽(琰)・咸(謙)・銜(銜鑑)諸韻系に所属している。
[e]主母音をしている「セン・ケン(ゲン)・ヘン」諸音形の墨筆音注加点に対して、朱筆音注加
点では、「減」「監」二字にともに「カン」「ケン」という二種類の音を施しているが、あとはす
べて[a]主母音をしている。呉音と漢音は主母音の違いによって区別されているかのように見え
る。ところが、この12字の用例に限らず、山・元・刪・鹽・咸・銜諸韻系に属するすべての朱
筆音注字を広韻⁹⁾に基づいて調べると、[a]主母音をしているばかりではなく、[e]主母音をし
ている音形もある(次の朱筆音注用例の分析を参照されたい)のである。それは、即ち、[e]
主母音と[a]主母音の違いは文明本における呉音と漢音を区別する唯一の基準ではなく、理由は
他にもあるということを物語っている。

上述諸韻系所属字のすべての朱筆音注のみの用例を更に等韻レベルで調べると、介音の有無
による主母音の違いが音注加点に現れてくるのである。

1) 二等の「山産欄刪謙銜鑑」諸韻の朱筆音注加点例

山産欄三韻は、次の字例で分かるように、原則として[a]主母音をしている。

山韻 カン-間 p4 艱 p274 閑 p39 癩 p266 クワン-鰥 p501 サン-山 p1

ケン-慳 p232 セン-潺 p66 孱 p424

イン-殷 p34 リン-綸 p12

産韻 カン-限 p23 簡 p63 ガン-眼 p118 サン-産 p14 盞 p11 ラン-欄 p816

セン-孱 p424 棧 p773

欄韻 カン-間 p4 覓 p745 幻 p488 クワン-鰥 p501 タン-綻 p111 袒 p92 ハン-盼 p1064

ゲン-幻 p636 ベン-瓣 p58 辨 p113

ただし、山韻のケン = 慳 p232・セン = 潺 p66 孱 p424、産韻のセン = 孱 p424 棧 p773、欄韻
のゲン = 幻 p636・ベン = 瓣 p58 辨 p113 などは、一見[e]主母音をとっており、違うのではな
いかと思われるが、山韻所属のセン = 潺・孱、産韻所属のセン = 孱・棧、欄韻所属のベン = 辨
は、それぞれ仙韻(潺・孱)、獮韻(棧・辨)にも所属しているし、[i]主母音をしているリン

= 綸 p12・イン = 殷は、それぞれ諄韻欣韻にも所属していることからすると、他の仙・獮韻所属字や諄・欣韻所属字の主母音原則に基づいて表記されていると推測できよう。そうすると、山韻のケン = 慳 p232、欄韻のゲン = 幻 p636・ベン = 瓣 p58 という3例は、説明がつかなくなる。特に、欄韻のゲン = 幻 p636 に関しては、同じ朱筆音注として「カン」の音形もある。これらの異様な用例は、呉音と漢音の混同乃至音符などの面で更なる考察が必要かも知れないが、いずれにしても、山産欄三韻所属字が[a]主母音をしているのは主な原則であることを動揺するような問題ではないので、別の機会に考えることにしたい。

続いて刪韻所属字は、「郇シユン」(p978)の1例以外、すべて[a]主母音をしている。用例は以下のようである。

カン-姦 p32 姦 p238 菅 p905 ガン-顔 p15 クワン-關 p432 関 p50 環 p424 還 p290 環 p380 鬢 p266
グワン-頑 p231 サン-刪 p979 訕 p408 ハン-班 p933 班 p53 般 p37 扳 p1063 攀 p327
バン-蠻 p432 マン-鬘 p593 ワン-彎 p1063 灣 p1079
シユン-郇 p978

賺韻所属字は、[a]主母音と[e]主母音の両方とも見られる。

カン-減 p16 サン-斬 p421
ケン-減 p602 セン-斬 p79

銜韻所属字は、監ケン p5911 例以外、[a]主母音。次はその用例である。

カン-銜 p65 銜 p651 監 p262 岩 p2 ガン-巖 p4 サン-鑿 p269 衫 p786
ケン-監 p591

鑑韻所属字は、監ケン p591 僭セン p30 懺セン p1096 の3例が[e]主母音である以外、[a]主母音。

カン-鑑 p5 鑑 p639 監 p262 サン-懺 p789 鑿 p269 ザン-讒 p238
ケン-監 p591 セン-僭 p30

賺韻「減」のカン・ケンや銜韻「監」のカン・ケン、墨筆音注加点のゲン・ケンや法華經音義のゲン音形を参照してみれば、ここの朱筆音注のみの用例は、表記上の呉音と漢音のユレかと推測されよう。そして、「斬・僭」のセン・サン加点は「懺」の墨朱セン/サン対応から見れば、これも呉音漢音のユレの可能性はあろう。「郇」は諄韻にも出ているので、そのように考えるなら合っている。

結局、刪賺銜鑑四韻の朱筆音注用例は、大体前の山産欄三韻と同じ主母音をする「-aン」型の音形をしている。そして、合口牙音・喉音の一・二等字の音注にのみ、「クワン」型の音注に[u]介音が反映されているが、これも[a]主母音をしている。

2) 三四等の元阮琰諸韻の朱筆音注加点例

三等の元阮韻は原則として[e]主母音をしている。八行音は大凡[a]主母音となっているが、

呉音の誤写かと思われる[o]主母音をするのも「反・翻」2例ばかりある。また、「キン」型音形の[i]主母音をしている用例(2例)に関しては、「菌」(p500)は広韻における複数韻所属字で、軫韻にも出ている。「掀」(p836)は「欣」字との関わりがあるかどうか、不明である。要するに「キン」型音形とは、原則として元阮韻に関係があるとは認められないであろう。実際の用例は次のようである。

元韻

エン-爰 p693 垣 p2 園 p36 援 p70 輓 p437 猿 p24 鴛 p213 冤 p766 宛 p770 怨 p30 焉 p35
ケン-萱 p235 喧 p294 誼 p311 軒 p490 騫 p48 ゲン-言 p14 元 p101 原 p3 源 p100 鼃 p681
ハン-煩 p31 繁 p62 繫 p53 樊 p47 緇 p73 蟠 p250 蕃 p73 翻 p729 翻 p1063 幡 p2 バン-番 p12

キン-掀 p836

ホン-反(右朱ホン左朱ハン)p99 翻(右朱ホン左朱ハン)p103

阮韻

エン-遠 p56 偃 p495 苑 p383 宛 p770 園 p699 峴 p1048 ケン-蹇 p447 榘 p557 卷 p587
ハン-反 p66 坂 p2 返 p21 飯 p9 バン-晩 p51 挽 p1063

キン-菌 p500

四等の琰韻は、「鑿・淡・貶」3例は、[a]主母音の「ハン」となっている。中では、「淡・鑿」は、広韻における複数韻所属(鑿は敢闕咸、淡は談敢韻)字であるので、それぞれ談敢・敢闕韻からすれば合っているのである。あとはすべて[e]主母音である。具体的な用例は次の通りである。

エン-琰 p1048 厭 p41 魘 p233 奄 p371 掩 p217 殫 p506 燄 p707 ケン-陝 p107 嶮 p588 俟 p224 檢 p182
セン-黠 p870 苒 p974 染 p222 漸 p141 ゼン-冉 p133 染 p21 テン-諂 p123 レン-歛 p71

サン-鑿 p492 タン-淡 p337 ハン-貶 p1070

以上の文明本朱筆音注加点例の考察から、[e] [a] のグループの呉音に対する漢音対応は、韻鏡の等に関わっていることが伺える。つまり、二等字「山産欄刪謙銜鑑」の場合は、[a]主母音の「-aン」型音形をするのは主な流れである。それに対して、三四等元阮琰韻所属字の場合は、原音では介音[i]・[ɿ]が介在しているもので、文明本では、[e]主母音の「-eン」型音形をするのは主体的である。それで、文明本唇内・舌内撥音字において、韻鏡の等韻原則が日本漢字音なりの形で働いているのは明らかである。

また、上述の朱筆のみの山攝諸韻三四等字の音注加点例と、「二」の [a] [e]グループにおける墨筆音注と朱筆音注の対応状況を合わせて見ると、[u]介音の反映がある一・二等字の場合と違って、開合の有無より、等韻を優先する傾向がある。例えば、繰り返してその実例を挙げてみると、

元グワン/ゲン (p498) 萱クワン/ケン (p500) [元] 巻クワン/ケン (p11) [阮・仙・獮・線] 願グワン/ゲン (p100) [願] 還(グワン/無 p544)[刪・仙]

（他の表出場所に「還ケン(p69)」のような用例はある。）

のように、本来中国語原音に存在する[u]介音は、墨筆音注には反映されているのに対して、朱筆音注には無視され、他の三、四等字と同様に「-eン」型音形とされている。

3) 唇音合口字の朱筆音注加点例

ところが、山撰元阮願韻所属の唇音字の場合は、朱筆音注加点では、「-eン」型ではなく、「-aン」型の「ハン」音形をしている。となると、朱筆音注の等韻原則に反しているかということ、実際は開合に関係があるようである。唇内舌内撥音字の朱筆音注加点で「ハン」音形をしているのは、二等欄韻「盼(p1064)」、四等琰韻の「貶(p1070)」は開口である以外、あとはすべて「合口」¹⁰⁾となっているのである。

例えば、

[桓]槃癩般繁蟠潘盤番磐[緩]伴[換]半絆判叛畔伴胖（合）

[刪]班斑般扳攀蠻[潛]版板（合）

[元]煩繁縻縻緡緡蕃翻幡番[阮]反坂返飯晚挽[願]飯万（合）

[凡]凡[范]范範犯[梵]汎泛（合）

などは、その用例である。韻図の唇音欄に照らしてみると、桓緩換韻諸字は外転第二十四合の一等、刪潛韻諸字は外転第二十四合の二等、元阮願韻諸字は外転第二十二合の三等、凡范梵韻諸字は外転第四十一合の三等とある。要するに、これら各韻所属字の共通点は、等ではなく、合口である。理由は何が分からないが、事実として、これらの用例では、等より開合の要素が働いているように見える。

また、「クワン」音形をしている、

[桓]桓完紈莞莞統忼忼官棺觀貫冠歡謹寬絙丸[緩]緩統管盪欸[換]換貫罐灌冠觀盪棺玩翫忼喚
煥館

[刪]關關還環鬟頑[諫]縮患宦櫛慣串

[山]鰓[願]勸

などの牙音・喉音字は、魂韻所属の「臚(p923)」以外、桓緩換(合口)、刪潛諫(合口)、山欄韻(合口)、願韻(合口)のみに現れていることも、その開合への配慮があることの傍証となる。

ここまで見てきた朱筆音注の主母音の要素や等韻の法則、開合の法則は当然ながら、[e] [a] グループの墨朱対応関係の説明に適用すると思う。二等山産欄・刪・謙・銜鑑所属字の場合は墨筆音より朱筆音の方がより中国語原音に接近している。三等元阮・琰韻所属字の場合は、朱筆音注より墨筆音注の方が中国語原音に近いようであるが、朱筆音注では、唇音字は合口韻による統一した音形であり、それ以外は[a]主母音ではなく[e]主母音をするのも統一した音形である。しかも、このグループでは、墨筆音注は[e]主母音をしているけれど、他のグループでは、違う種類の音注をしているのも見られている。

2、[o] [i]・[u]・[e]・[a] のグループ

[o]主母音をする墨筆音注に対応している朱筆音注において、侵寢沁欣隱焮諸韻所属字の場合は[i]、元阮願仙嚴韻所属字の場合は[e]、勘凡范換桓韻所属字は[a]、痕魂文吻問韻所属字は[u]主母音をしている。これらの用例だけなら、一見主母音の違いによって、呉音漢音の分類が行われているように見えるが、しかし、そのそれぞれの韻部に所属する朱筆音注字の用例は、同じ表出字の墨筆音注に対応して付されているもの以外、墨筆音注が付していない朱筆音注のみの用例もあるから、そのすべての用例を集めてみなければ、全体の状況は把握できない。それで、朱筆音注のみの用例も全部調べてみると、呉音と漢音の対応関係は、そう単純な状況ではないのである。確かに主母音の違いが呉音と漢音の対応に繋がる部分はあるが、他の要素もまじっている模様である。朱筆音注を中心に各グループの状況について検証してみよう。

1) [o] [i]のグループ

[i]主母音をする朱筆音注加点は、主に臻撰字範囲内に現れている。文明本において、眞軫震臻欣隱焮侵寢沁韻所属字のほぼ全部と、諄準文問韻などの所属字の個別的な散在がそうであるが、呉音との対立が確認できるのは、侵寢沁欣隱焮諸韻に限られている。中では、眞軫震臻欣隱焮侵寢沁諸韻は、いずれも開口三等¹¹⁾である。[o]主母音をする墨筆音注加点より、[i]主母音をする朱筆音注加点の方が中古音(復元音)に合致している。

2) [o] [u]のグループ

[u]主母音をする朱筆音注加点は、主に文吻問韻所属字に現れているが、魂混慁韻所属字にも若干(「貢フン p534」「噴フン p1024」「悶 p41」「忖シユン p977)」まじっている。しかし、文明本の文吻問韻所属字と魂混慁韻所属字の朱筆音注加点は、それぞれ[u]主母音と[o]主母音をしているのは基本的な形である。それによって文吻問韻の合口三等と魂混慁韻の合口一等という等の違いは、はっきり現れている。また、主母音の性質からして、墨筆音注の「-o ン」より、朱筆音注の「-u ン」の方がより中国語原音に近かろう。したがって、「二」のグループ墨筆音注(モン)・朱筆音注(ブン)対応例に関しては、子音の要素も考えるべきであるが、母音のこの等呼や主母音の要素も関わっていると思われる。

3) [o] [e]のグループ

この[o]主母音墨筆音注加点と[e]主母音朱筆音注加点の対応する用例は、主に元阮願韻所属字範囲内に見られる。朱筆音注のみのすべての用例についての調査は、前の1・2)に見てきたので、重複をやめて、詳しいことはそれを参照されたい。ただ、痕韻所属の「根コン/ケン p6、

p691」一字例だけは、他の痕很韻所属字と違って、朱筆音注加点は「コン」ではなく、「ケン」となっている。もっとたくさんの文献を調べて確認する必要があるが、『聚分韻略』¹²⁾の左注唐音には「ケン」の音注はなかった。

4) [o] [a]のグループ

[o]主母音墨筆音注と[a]主母音朱筆音注対応の用例は、勘韻「紺コン/カン」(p663)1例と、桓韻「丸ラン/グワン」(p444)1例、換韻「叛ホン/ハン」(p463)1例のほか、平凡元阮韻の「ホン」と「ハン」の対応用例がある。「丸ラン/グワン p444」「叛ホン/ハン p463」の朱筆音注は、前の1・3)に見てきた桓緩換韻所属字朱筆のみの「クワン」型、「ハン」型音注加点例と一致している。「紺コン/カン p663」の朱筆音注は、他の勘韻所属字の「-a ン」型朱筆のみの音注と同じである。阮韻「返ホン/ハン p103」の朱筆音注加点は、1の[e] [a]グループの「返ヘン/ハン p12」の朱筆音注加点と同じであるが、しかし、墨筆音注加点は「ホン」と「ヘン」の違いがある。前の「三」を参照すると、文明本元阮韻所属字墨筆音注加点と法華経音義元阮韻所属字「返煩」の音注に、「ホン」「ヘン」二種類の音注形式があることが分かる。

3、[i] [e]・[o]と[u] [o]のグループ

1) [i] [e]・[o]のグループ

イン エン・ラン

桓線韻所属字の「院イン/エン」(p5)について、他の朱筆音注加点のみの用例を調べたところ、「院イン」(p31)「院エン」(p416)と混在している。欣山韻所属の「殷イン/ラン」(p5)の場合は、朱筆音注加点用例に「殷イン」(p34)が見られる。不安定な状況が目立つ。

ピン ベン

「便ピン/ベン」(p628)は仙線韻所属であるが、同じ仙韻系の朱筆音注加点のみの用例[仙]ヘン篇 p26 偏 p115 翩 p123 扁 p113 榧 pp500、ベン便 p70 鞭 p53(鞭ベム p147)、[彌]ヘン辨(禰)p113 編 p114 ベン辯 p90 冕 p78、[線]ヘン變 p17 卞 p193 偏 p115 遍 p115 弁 p734、ベン拵 p119 便 p70 変(變)p417)も「-e ン」型音形をしており、朱筆音注加点の方が漢音で、墨筆音注加点の「ピン」は呉音であると判断できる。

なお、[i]主母音をする朱筆音注加点用例の全体的状況は、2・1)を参照されたい。

2) [u] [o] の対応例

墨筆音注加点例としては、[u] [o]対応関係をしているのは、恩韻所属の「寸スン/ソン」(p12)1例だけである。朱筆音注加点のみの例は「寸ソン」(p1125)のようになっているが、魂韻系では、若干「温ウン」(p203)「貢フン」(p534)「噴フン」(p1024)「敦ジユン(p409)「村シユ

ン(p977)「刃ジン」(p120)「悶フン」(p41)のような例外はあるが、[o]主母音をするのは基本である。

六、まとめ

前章で母音を中心に広韻・韻鏡に照らしながら文明本唇内舌内撥音字の朱筆音注加点用例を考察した結果、朱筆音注の構成状況に、主母音、等、開合の法則が関わっていることが分かった。例えば、主母音が朱筆音注の構成に関わっている現象として、山撰二等山産欄刪謙銜鑑韻字の音注加点において、[a]主母音をする基本的な態勢を見せている(五・1・1)参照)などが挙げられる。等の関わっている部分として、山撰二等字の主母音が[a]にして呉音[e]と対立しており、山撰三四等字の場合は、唇音合口所属字以外、いずれも[e]主母音であり、二等字との区別がついている(五・1・2)参照)。そして開合関係の例として、唇音合口の元阮韻所属字は、一律に合口である桓緩換刪滑凡范梵韻所属唇音字と同じ「ハン」型音形をしている(五・1・3)参照)。

しかし、残念なことに、そういった朱筆音注加点にユレがあったり¹³⁾、開合の実現のために等を守りきれなかったり¹⁴⁾、開合より等を優先したり¹⁵⁾しているのは、まとめきれない部分があると言わざるを得ない。

最後に、ここまでの調査は、ほとんど文明本における朱筆漢音の墨筆呉音への対応という一方的な角度から試みてきたもので、しかも唇内舌内撥音字範囲内に限られている。朱筆音注にそういう主母音、等、開合の法則はどこまで関わっているか、墨筆音注に関してはどうかを考える場合は、朱筆音注の全用例及び墨筆音注の中古音との関係を調べ、更なる比較研究が必要である。今後の課題としよう。

<注>

- 1) 中田祝夫『文明本節用集研究並びに索引』影印篇(風間書房、昭和45年7月25日)による。
- 2) 前掲脚注1のページ数による。
- 3) 奥村三雄「慶長壬子版聚分韻略」『聚分韻略の研究』付録・影印(風間書房 昭和48年6月30日)。
- 4) 湯沢質幸「唐音と呉音・漢音()」『唐音の研究』(勉誠社 昭和62年2月25日)。
- 5) 心空「慶安刊本法華經音義」『倭點法華經』下所収 日本古典全集之内(日本古典全集刊行会 昭和9年11月25日)。
- 6) 小倉肇「【三内音義掲出字音一覧表】」『日本呉音の研究』研究篇(新典社 平成7年1月6日)p53。
- 7) 本稿では、記述や考察の便宜上、法華經音義の「ヘム・ホム」音形を、とりあえず「ヘン・ホン」と見なす。
- 8) 前掲脚注3。
- 9) 本稿で参考文献として使っているのは、陳彭年等重修「張氏重刊宋本廣韻」『校正宋本廣韻』(藝文印書館 中華民國83年12月)である。
- 10) 大島正健『改訂韻鏡』(三省堂書店 明治45年7月1日)による。
- 11) 臻韻の等については、戴震『廣韻獨用同用四声表』によると、「眞十七諄臻同用」とある。また、王力

は韻図作者の韻類における等の分類を紹介するとき、臻韻を三等に帰している。王力『漢語史稿修訂本』上冊（中華書局 1980年6月）p56参照。

- 12) 前掲脚注2。
- 13) 例えば、[謙]韻所属字の「減ケン/カン」(p226)、[銜鑑]韻所属字の「監ケン/カン」(p502)のような場合、墨筆音注の「ケン」、「ケン」に、朱筆音注は「カン」「カン」と対応しているにもかかわらず、朱筆音注加点のみの場合は、「減カン」(p16)・「監カン」(p262)もあれば、「減ケン」(p602)・「監ケン」(p591)も見られる。
- 14) 例えば、唇音合口三等元阮願韻所属字は開口三四等字の[e]主母音と違って、「ハン」音形をしているなど。
- 15) 「二」 [a] [e]グループで[u]介音表示がある墨音注「クワン」に対して、朱音注は他の三四等字朱音と同じ「ケン」で対応しているなど。

主指導教員（錦 仁教授） 副指導教員（大橋勝男教授・船城俊太郎教授）